紹介・臼杵市文化財管理センター蔵『長崎道中日記』（三）

徳岡涼

（白紙）

一、三月八日　朝雨辰刻過より晴。大北風吹。辰刻過長崎桶屋町茶屋甚四郎方出立。亭主甚四郎見送に罷出。

時津道通り。

時津　長崎より三里。

巳半刻着。直に船問屋有田屋へ休。時津より彼杵へ渡る船は壱人前船賃弐百文。三丁立の時は、弐百五拾文。乗組拾五人より弐拾人迄の積といふ。又、壱艘借り切は、弐丁立弐貫五百八拾文、三丁立なれは三貫文。

尤、彼杵より渡ては船賃下直ならは乗べく、高直ならば陸にて、大村通、長崎へ行べしといふ意を以て、船賃乗合にても借り切にても、下直にて渡す事也。

又、時津より彼杵へ渡るには、時津は不便利の所ゆへ、船賃至て高し。其訳は長崎より時津へ態々出るは、彼杵渡りのみを」（47表）志して出る事にて、若し風波あらきか船賃高直なりとて、渡らぬ事はならぬ所也。さも無之は、又、長崎へ引返さねはならす、時津通りぬけの出来ぬ所也。よつて時津の者風波の時か、又、向ふ風などの時は見込て、船賃を増事也。付ては長

」（46裏）

崎出立の時、能々天気を見定めて、彼杵渡六ヶ
敷日和ならは決して時津へは越べからす。
今日、大北風日和にして則向ふ風にて、三丁櫓押
に漸午刻に時津を押出す。波立強く、船すゝみが
たく所々嶋陰にて、暫く心々休み、風の変りを待。
申半刻、松林有之。磯辺に船を寄、暫く浜辺を徘
徊し、松林の中に分入しに間近く村あり。家居宜
所を見かけ尋行しが、此所森園村と申て、大村御
家人北村金平といふ人の在宅也。一と構ありて、
東向壱間玄関家宅」（47裏）恰好宜。亭主金平は、
十五歳にして大村城下へ半道余も有之。此所より
相勤候由。金平、母と祖母三人暮と見へ至て家内
丁寧にあいしらひければ、けふは船心にて船中昼
食もつかはざりしに、幸こゝにて茶をとて昼食事
なしぬ。彼家の供、焼酎を裂せしが酒の糟と唐芋
にて取よし。八里半と申よし。
此里門毎に七五三縄を張。何故と尋しに、六月の
三十日と十二月の三十日に張替候由答ふ。暫休息
し、気分も心地能なりけれは、又、元の船に帰り
ぬ。夫より暮るゝ遠待風のなぎかたより、又、押
船にして、漸其夜四つ時分に彼杵へ着船。〈三月
朔日は一時に馳せしが／けふは向風にて六時余
かゝる〉。

彼杵

彼杵大高札隣　筑前や兵助泊。

一、九日　晴　午刻過より雨に成。
卯刻過彼杵出立。」（48表）
辰半刻、嬉野宿。小野原勘彦方着。預ヶ者、夫々
受取。直に嬉野出立。

嬉野

追分〈右塩田／左竹尾〉道
三坂峠
三坂　茶や三軒
長谷
ウトチ村
袴野　嬉野より弐里
貴船社あり。社前店弐軒
内田　店数々有。
枯木峠
峠に佐嘉侯、御休所有。
上西山村　店壱弐軒

塚崎入口手前右に、三船山、朝鮮山ともいふ。右手に清正公堂あり。」（48裏）

塚崎　嬉野より三里半

佐嘉侯家老〈八千石／知行〉竹尾讃岐在所也。本名は塚崎なれ共、今多く竹尾と呼。

入口新町を折廻ると、町屋店方ありて、暫行と道広く、左右（片側）に十軒宛左右弐拾軒余。入湯人の旅宿と見へて、店先柱二階の椽・欄干等、凡赤ぬりにて派手なる家造あり。右側の一番目の家は脇本陣之由。諸国より入込之入湯人も多く見へたり。行当り佐賀侯御本陣長屋門にて一と構の屋鋪あり。傍左に入門あり。門口に番人ありて、湯銭を取。上（十文）、中（五文）、下（三文）。温泉瓦葺三軒にして仕切あり。温泉奇麗にして至てあつし。惣鋪石にて、湯屋中々立派の事也。四方廻り、板椽付て、入湯の人是に上り、或は臥之。短柄の柄勺一本宛所持して、始終湯をからたの痛所にくみかけ、或は髪をさばきて天窓よりかぶるものも」（49表）有之。女湯は別に有之といへとも、無差別。一所に入浴す。夜分は四つ時限。

嬉野よりは当所は新湯、殊に場所柄と見へて繁昌せり。或人のいふ、豊後は湯ノ平・別府の湯は是には大に劣れりといふ。

御前湯とて貴人の湯は此所より高みに別に湯屋ありといふ。

門外に牛馬の湯あり。中に馬立あり。当初の湯治人多き時は千人余も有之由。先年は遊女も数々有之候得共、近年、厳敷御停止に相成候。

大高札の傍、人馬継所あり。

此所に入湯して、当宿にて昼食事直に出立、雨に成。

追分　〈右佐嘉道／左唐津道〉

是より唐津道に

中野村

川上（カウカミ）　茶や・酒家もあり。」（49裏）

左に淀姫大明神の社あり。入口鳥居の内に梅の古木の朽たるありて、其傍に松桜もあり。

半所村

戸坂峠　少しの峠也。峠に茶や弐軒あり。

山中村
川古宿（カハゴ）　塚崎より弐里。
　此宿四五丁も可有之。右側人馬継所。
本部宿（モトベ）　川古より十丁余。
　右川古本部両宿にて、月に上十五日は川古、下十五日は本部にて人馬継之。此宿より暫行。佐嘉侯、御番所あり。左川向百（モ、）の川村を見。五六丁海岸を下り、
　従是南　佐嘉領　石建
従是北　池田岩之丞支配所　棒木
　横に、肥前国松浦郡川原村とあり。
　此棒木より、大川野まで弐拾八丁之由。
川原村　村入口番所有。　」（50表）
大川野宿　川古より弐里四丁
　御料所
　御宿五六丁も可有之。
今日、昼後塚崎より雨に成、次第に大降。道路難義にて、漸暮六つ半比当宿に着。左側　田中屋喜市泊。

一、十日　大雨　大北強く吹。向ふ風にて殊の外路次難義。昼後鬼塚の渡しより雨晴、大風に成。
卯刻過、大川野出立。
竈江村
　此間少しの峠を越、谷間を行。
駒鳴村
当村より谷合を次第登り、至て淋敷所にして、炭焼場あり。暫し時、坂急也。
駒鳴峠　池田岩之丞支配所　堺
　唐津領」（50裏）
稗田村
徳須恵宿　唐津領　大川野より弐里五丁、宿内五六丁も可有之。
片島村
千々賀村
川原持　茶や壱弐軒
藪田
鬼塚　茶や数々

渡　川幅広し、此渡は往来渡にては無之故、渡賃壱人前四文宛。

唐津城下　鬼塚より本往還通り壱里

肥前国松浦郡唐津城主小笠原佐渡守侯御城下にて御高六万石。

帝鑑間　江戸より四百十里

〈文化十四年／改易〉水野左近将監忠邦跡」（51表）

一、唐津御城下は、此渡を不渡。左に往還あり。両川岸、松並木有之。絶景無類也。尤此辺は致洪水候所と相見へ候。千一水出候て、此渡差閊候節は、唐津御城下へ廻り候へは、浜崎へ行に滞に不相成候由。

一、此渡川船致上下、前段徳須恵且、其外所々へ唐津より船通り候由。唐津は弁理宜所と相見へ候。

一、唐津城は海城にして城の下直に海也。九州大名の乗船の時、袴を着ながら、家中の乗船するは臼杵と唐津と三ヶ所也と聞。

唐津城は鶴の形に似たり。首は鳥嶋、唐津の両松原は羽、唐津城は鶴の体にして舞鶴の城ともいふ。沖に高島・大島・鳥嶋とて三つの嶋見ゆ。肥前名古屋は唐津より近く西の海浜也。」（51裏）

鬼塚の渡しより此所通行。

原

此辺より左に唐津御城見ゆる。

鏡村（カヽミ）　茶屋有。

鏡大明神の社、左に有。宮前四五丁計の原也。九月九日祭礼の由。角力杯有し所と相見へ土俵の跡有之。鏡大明神は太宰少弐藤原広継を祭る。二ノ宮には、神功皇后の御鏡を祭る。よつて鏡の宮といふ。社僧は、御燈（ゴトウ）坊也。是所はひれふる山の麓也。

此辺より唐津は都て松浦郡也。然は名所方角抄に、鏡の宮松浦山の未甲の麓也。宮は東向、北西は海也。宮より十丁計西に、南より北へ浦へ流れ入りたる塩入の大河、二瀬有之。松浦川、又鏡の渡りとも、くりや川共、世俗には申候也。此御神は、太宰大弐也と有之は、此鏡」（52表）宮の事成へし、右塩入の大河と申は右鬼塚の渡也。此松浦郡には名所旧跡多し。

松浦山

鰭振（ヒレフル）山ともいふ。
鬼塚より鏡村へ出る右手の山なり。唐津の城よりは東に当りて、此山至て高く、草計りの山にして棒木なし。只、山の嶺に一本松ありて、是は穂並の松といふ名木の由。則此ひれふる山は松浦佐用姫の古跡也。

浮島
玉嶋川
草野、大村
千賀の浦
此四つの名所は浜崎宿迦れ也。
一、佐夜姫の社あり。こふ石とて大臣渡唐の砌、佐夜姫慕ひ石になりしと」（52裏）申伝ふ。其石かべ嶋に有之よし。
一、内百番　鵜飼の諷謡の文に、
　漲る水のよとならはいけすの鯉やのほらん玉嶋川にあらねとも小鮎さはしるせゝらきにかたみて魚はよもためし
と申事の候、此名所の玉嶋川の事を引用たるにや。

砂子村
此村入口壱丁手前に
　従是東　対州領
此砂子出口より浜崎迄、拾八丁海辺松原至て奇麗也。
此松原を虹の松原といふ。松露・防風名産にして舞子の浜の風景あり。
」（53表）

浜崎宿　対州領　徳須恵より三里五丁
　対州府中へ四拾里
当宿は、対州下県郡府中城主宗対島守侯御領分也。御高は拾万石以上の格。
此浜崎に壱万八千石有之。又、田代に壱万石有之由。此両所は、対州侯御台所にして、筑前秋月の五万石に生し、稲の苗を田代壱万石に植付るといふ程の処なり。
一、対州は米鮮の嶋にて朝鮮より毎年、十二万石宛対州へ貢といふ。田少き所の由。
一、朝鮮釜山海へ対州より役所を建、交代にて勤番之由。

此宿内拾丁も可有之。此宿左に諏訪明神社有之。社

の傍に砂あり。此砂真虫除によしとて、諸人受得て帰る。」（53裏）

浜崎吉井大高札には対馬（花押）

村に小高札には

家老衆の両名あり〈平田大江／江口伝〉

江尾

渕上

此所より鹿賀迄の間、海岸松原を行、深浜といふ所也。唐津御城を見渡し、向地名古屋の鼻、呼子杯いふ湊有之由。右名古屋は、豊臣公朝鮮征伐御在陣の所也。名古屋の鼻を見越し、壱岐国遙に見ゆる。

かべ島

鹿賀村

立花峠

〈肥前国　松浦郡／筑前国　怡土郡〉堺石建

吉井　浜崎より弐里

店数々海辺也。」（54表）

此間〈従是西　対州領／従是東　中津領〉

大入（ダイニウ）

さなし

深江宿　中津領　浜崎より四里。

宿内拾丁余も可有之。宿宜人馬継所。中津領此所へ壱万八千石有之由。中津より御代官交代にて此深江に相詰、御年貢届納候由。当初は中津の御納戸と申所柄の由。

吉井過より暮候て夜戌刻着、小倉屋角兵衛方泊。

当家亭主角兵衛八十歳にして老健にて、客賄諸事心を付。しかのみならず、食事の砌、手づから飯を盛。何歟無援用取肝煎せ、倅は他国の由。名物白魚茶碗にて出す。臼杵の白魚のごとく風味もよし。」（54裏）

一、十一日　晴天

卯前刻深江出立　深江より前原、前原より今宿までは岡手往来。海辺にあらす。

今宿より、生松原、海辺に出る。

増田村

田中村

牧村

左にかむり村・岩本村を見る。かむりは、御料

所の由。同所へ政右衛門と申酒屋、近国名高き豪富の由。岩本も御料所中津領入更の由。右屁田村は福岡領。此村上屁田山といふ有。筑前の小富士とも称す。此辺より見ては、格別不面白。福岡辺より見て富士に似たり。

赤迫村　店有

此村中に中津侯番所有。三四丁行。

中津領

福岡領　御影石にて立派也。

福岡領は志摩郡　」（55表）

此辺よりけやの大戸と申所へ行路あり。同所は、海辺にて大なる岩に穴あり。石の柱にて家居、宮殿造り有之由。奇異の所なり。

大戸大神霊窟図并略記

大戸大神の神窟は筑前志摩郡芥屋村の海辺にありて、石の柱を以て、積て山と為したる奇絶の絶景也。大祖大神塩土神座なと霊現の神の神地に接し、竜王子の社・産屋やしきなと近し。又、立石崎引津の浦・弓やの山なと古歌によめり。名所皆近し。

抑此神窟数十間、船入るゝに、奥はくらうして窺ひかたし。山石の浜ありて、猶、その奥極めがたしと之伝ふ。元より大門明神の鎮座にて、諸願を祈る霊地故、あえて、奥を極むる人なし。只、雨請の祈りに、神へ舟を浜に着て、神供を備ゆるのみ也。あなかしこ近頃遠国の人のまうで多くなりて」（55裏）由来を問ふ人のため、図をあらはし、其略をしるすのみ。

図は略す

御柱石　祓戸　大祖大神

沖の方には　姫嶋　壱岐　対州

朝鮮の方見へる。

神主　小金丸氏蔵

荻野原村

前原宿　福岡領　深江より弐里

入口広き堤あり。福岡領は鉄砲を禁し候由。筑前にて、堤の内には鴨千羽も居候。堤多し。宿内十丁余、右側駅場有之。

潤村

池田村　茶や有
高田村　茶や弐軒
周船寺村　店有、出口広き堤あり。」（56表）
深江より此所迄は海辺にあらす。
今宿　前原より弐里
宿内拾丁余駅場左側、宿迦れより松原也。夫より少しの出鼻を廻り、今宿より海辺に出る。
生の松原　茶やあり五軒。
此松原名所也。海辺にて絶景也。此所左右松原にして、中道に砂原にて道幅五・六間も有べし。実に奇麗の所也。松原の中程右に一二丁入込と、豊臣太閤秀吉公朝鮮征伐のため肥前名古屋へ御下向の砌、植置玉ひし逆枝の松とて、石の玉垣のうちに、古松壱本有。
右手に稲荷社あり。
右手に茶や五軒あり。
左手は海にて
今津　玄界嶋　野古の嶋
鹿嶋（シカ）　鹿浜　なだ浜共
机嶋　柱嶋　」（56裏）
三里の浜也。香椎潟ともいふ。
右何れも見渡し絶景也。野古の嶋・鹿嶋・香椎潟、いつれも名所方角抄に見へたり。何もよき絶景也。
姪の浜宿　今宿より壱里拾壱丁
宿内駅場左側宿宜。宿を迦れ、暫行。愛宕下茶や三四軒。
愛宕山
百壇あり。至て高し。山上の茶屋より東北を詠れは、真下に松原ありて海辺に連り、筑前侯鉄砲打場あり。夫より、西新町登向に、福岡御城、又、北の方出鼻には東照宮勧請ありて、少し沖に産嶋といふ小嶋あり。福岡・博多遠見には此愛宕山随一の所也。当山へ肥後家中斉藤権之助高寿作の詩とて、生の松原より」（57表）此辺の風景を述らる詩作ありと聞。
もろみ川
幅壱間余に、長七十間も有べき板橋架る。至て手奇麗也。
凡て筑前は一切手奇麗キヤシヤにありて、上品

なるは、其土地よりして京都に似たり。

同川

青石、幅壱尺に長三尺の飛石あり。下国には珍敷奇麗の飛石なり。

福岡城下　姪の浜より壱里半、但し御城下入口迄は半道位。

筑前早良（サウラ）郡福岡城主松平美濃守侯、御城下にして御高五十二万石余。

大広間　江戸より二百九十八里

城下入口を西新町といふ。長き通り丁にして、左側に、」（57裏）

紅葉八幡宮

石鳥居の銘

筑前国主源姓賜松平氏光之建立

松平右衛門佐従四位侍従光之侯御事也。暫行之。

左側に

鳥飼八幡宮

夫より見附御門を入、通り町より大手御門前、至て広く御堀幅弐拾間、満水也。御門前瓦葺、馬建十疋立有之。大臣家登城之節の馬立と相見へ、其並ひに学問所有之。折廻りて大名小路。

飯田覚兵衛（二千五百石）　朝日弥九郎（小西ノ末千五百石）　小早川隆景の二重門ありて、其内に当時林何某屋鋪と成。福岡は町屋も御曲輪内に付、旅人止宿不相成。勿論宿屋も無之。福岡の町は数少く、博多は町数多し。

すのこ町といふ所、駅場有。」（58表）

一、福岡御城下は九州第一の所成べし。侍小路何れも三千石以上の屋鋪は京都大名小路に等し。肥後熊本も大造成所なれ共、土地高低有之、見場不宜。福岡には劣れり。別て、御領分打開け名所旧跡も多、海辺の絶景無類。誠に九州の京都といふべきや。

一、鳥飼八幡・海路八幡等、御普請所にて奇麗也。当所は別して八幡宮を大切に尊敬する所見へたり。

一、東照大権現御社奇麗に有之由。

社領三百石。本殿の内宝物、蜀江錦・キテウ・競馬の画・政元の絵の衝立持由。古法眼の天井の鳳凰・次天井は雲龍。三十六歌仙の画歌は、宮方御

筆跡の由。〈拝見料十人已下何人にても／百銅の由承る〉

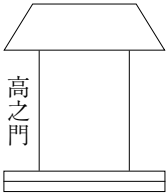
一、福岡は三斗三升俵。国札は生蝋会所と有之。裏に大坂町人の名前有。

一、福岡より佐嘉へ十七里、久留米へ十壱里。」（58裏）

日田彦山へ十六里つゝ、秋月へ九里、小倉へ十八里。

一、大高札

美濃守（花押）



幅弐間

幅は狭く殊の外、恰好高き高札也。御領分中、何れも此通り恰好の高札也。

一、福岡領は庚申神、庚申天と石に彫て建たり。

」（59表）

福岡すのこ町駅場へ、荷物等預け置。未半刻より太宰府参詣。

福岡東の見附より出る。折廻りて川端松原を通り、塩漆喰にて陣立の橋あり。是を渡り。

片ヶ瀬　茶や有

半道原　同　四五軒

坂付ヶ　同　四五軒

月熊　同　弐三軒

福岡より二里

雑所野（ザッショノ）　茶や数々煮売店等有之。博多より三里。

此村中に右側

〈那可郡／御笠郡〉堺石建

村迦れに着。立の森といふ名所有。

尾田　店有

下水城　同　」（59裏）

本水城　同

洗出し　同　四五軒

関屋　同　九軒有

左に衣桂天神

此所より右二日市へ拾八丁、左宰府へ廿丁。尤、宰府へは寄道也。乍併人馬無之。二日市へ不立

寄候得は、宰府より甘木の方へ出る近道あり。寄に不成。此所に苅萱の関跡あり。
右追分より宰府の方に行。
左に観音寺、往昔は四十余ヶ寺有之候由。当時弐ヶ寺残れり。此所に
天智天皇御座の跡、木の丸殿の花、旧跡あり。仍て宰府の辺を西の都といふ也。又観音寺の並ひに戒壇寺あり。又、山つゝき北に都府楼の跡あり。此上の山を四方寺山といふ。高橋氏の城地也。中峯に高橋紹運、岩屋城是也。討死の塚、松一本見ゆる。」（60表）

一、福岡より大宰府参詣道は、丸亀より金昆良参詣の心地して道幅広く、平地にて路次至てよろし。福岡家中遠騎馬といふ。

宰府〈福岡より四里／博多より五里〉但し三十六丁也。
筑前国御笠郡太宰府
入口川あり。思川といふ名所の内也。
町内
銅鳥居　廻り壱丈位。

此間壱丁余。両側拾軒余。奇麗の宿屋あり。
御宮の方より、
右側　一和泉屋　二大野屋　三松屋
左側　一呼子屋　二笹屋
右の五軒別して立派の屋宅にして諸事上方風の旅宿也。就中いつみや、居蔵造り新宅にて大家也。
酉半刻、右側大野屋重三郎泊。当家は、臼杵立宿ともいふ。
宰府天満宮、暮六つ限御門閉。平日は参詣不相成候由、今十一日は例月」（60裏）禁裏御所の御祈祷日とて、今晩は四つ時に御門閉。参詣出来候由、幸の事に付、大野屋に着と、其侭にて夜中天満宮へ参詣。御神燈数々賑はし。されとも、晴夜にて難見分直に宿へ帰る。

天智天皇御願書
天原山安楽寺
本尊薬師如来
境内に菅家御廟あり。

天満宮

祭　○正月元日ヨリ七日マテ大祭也　○二月廿四日廿五日
○四月廿日　御更衣祭○八月廿二日ヨリ廿五日マテリ御幸アリ
○十一月廿日　御更衣祭
嘉永四亥年九百五十年御神忌に付、二月十一日より廿五日迄、御法事有之由。
一、徳川家御朱印なし。筑後国水田（ミツタ）千石除地也。依之黒田家より、社領三千石御寄附、是を以て配分す。
」（61表）

一、別当五家
大鳥居（ドリ）　近年延寿王院と勅許あり。四代前より清僧と成。当主京都高辻家御公達下向信全と号。
小鳥居（ドリ）　隠居信泰　当主信昇
御供屋　信々
執行坊　信々
浦之坊　信々
有故而韓信の字通りに用ゆ。
一、三綱
上座坊
寺主坊　小鳥居小路　当主観増
都維那坊　安秀院共云
五別当三綱は菅家血脈天　台宗にて、妻帯の由。
一、文人（モンニン）　此三家社家也。宰府にては文人（モンニン）と唱ふ。
小野伊与守　小野加賀守　小野但馬守」（61裏）
以上廿五家、是を上官といふ。
一、天拝山へ一里。
一、薬種神事と申事は、宰府にては無之由。
一、菅家御弟子味酒安行之末（安行ハ武内宿祢末）
満盛院（マンジヨウ）
別家　検校坊
同　勾当坊
此満盛院に家筋。天満宮の御神体は取扱受持の由也。
満盛院の裏に安行の宮あり。此内に白太夫は祭り込らる由。もと白大夫は菅家播州曽根より、京都御気遣にては御差返し被成候て、筑紫には下向無之。夫故白大夫社と申は無之由。
一、梅御守
一、宰府市中に造酒家七軒あり。
」（62表）

一、十二日　晴天
卯刻過より天満宮へ参詣。相済候て大野屋出立。
町と坊中の間、
石鳥居、廻り八九尺程。
鳥居を入と御休所あり。夫より中通り。敷石此
間三丁程、左右坊中数々、向行当り、
延寿王院　大鳥居といふ。筋塀也。
左に取。池の前に、
石鳥居　廻り七八尺程。
左の方　神興堂　額浮殿
大成池あり。心の池といふ。
是は叡山八代法性坊と申。菅家の師也。堀け。
不池の由。心の字に相成居候由。
此池中一つの反橋を越し、中嶋右へ十一面観音
の宝塔あり。夫より直成橋を越、中嶋右の方、
志賀大明神の社。また」（62裏）反橋を越し小
堂あり。
十一面観音宝塔の額施無畏
石燈籠数々
左右共茶屋数々
楼門
表の額　感応　左右銅の釣燈籠数々
裏の額　仰高
三つ　感通
聖徳
本殿
正面の上にさしわたし三尺程の鏡一つ。
壱尺五寸程の鏡一つ。
御戸帳前に〈禁裏御撫物／仙洞御所御撫物〉
台に居
聯　右の柱　千里飛梅　万世流馥
左の柱　一夜生松　百代増縁
左右の釣燈籠数々。」（63表）
殿前に大磁石　本殿南向
聯
文章（右の柱）命世振蘭藻於一時
聖徳（左の柱）配天享蘋蘩於万祀
左右に銅の花瓶
右の方　飛梅の古木
左右　銅燈籠六
右に　銅の蓮葉手水鉢

左に　銅の香爐〈屋根／赤金葺〉
右に　双林塔　上の丸　黄金の由。
右の方
東法華塔　此前にも小社一つあり。
此傍にも中社二つあり。
右の外小塔堂五つあり。
左に堂一つ額　安養院とあり。
外に小社三あり。
廻廊　廿三間四面　絵馬数々。
本殿より左の方
大講堂　薬師
天智天皇勅願霊場安楽寺といふ。」（63裏）
西法花塔
鐘楼
三十三所観音堂
梅　数株
往古は梅数千株有之候処、中古立花某城攻之節、宰府類焼にて梅も焼失に相成。其節御殿は無別条。
楠一木大木也。
一、宰府の上の高山を竈門山といふ。又、三笠山とも宝満山ともいふ。其外染川杯名所方角抄に見へたり。
一、宝満宮へ宰府町より壱里半位、産八幡宮へは弐里の由。
」（64表）
（図は略した）
」（64裏）
此分先書の写、此筋通行せず。

二日市　宰府より壱里
宿内　五六丁
石崎村　はりすり　追分
小島村
むちかけ　此所より宰府への近道あり。
御笠郡・夜須郡堺
二村町
大入　此所より小倉へ米山通山家宿え之道有。暫行、山家宿左に見へる。
ぞをやく
石櫃（ヒツ）　間の宿也。　二日市より弐里。
此所より右に久留米の追分有。
松崎駅へ弐里。松崎より久留米へ四里。

松信村　此所に大堤あり。廻り壱里といふ。
篠熊　大養町　長者町
当所村
栗田村　此間田の中に弐三枚敷の森有。肥前佐賀の内の由。珍敷事也。」（65表）
阿弥陀か峰　此所より秋月へ弐里。追分有。
わり木村
甘木　二日市より四里
　五十丁道に付、別して遠し。
宿入口川有。秋月より流れ出たる川也。右長者町より此川迄は秋月領の由。甘木は福岡領也。
宿十八丁も可有之。久留米・日田道、追分あり。暫行。
〈北　夜須郡／南　下座郡〉堺石
石の足
羅漢茶屋　此所より三丁程行、一つの茶や。
　傍より彦山道あり。至て小さし。
此間川あり。平生は水浅し。出水強き川の由。
合の久保　横大道
十文字

〈右豊後道／左彦山道〉追分有
櫨畑村
〈西下座郡／東上座郡〉堺石」（65裏）
入地村　平松〈間の／宿〉をへ田村
通り戸　えその宿
此所より筑後川の端に出る。川筋弐丁余の瀬有。川向は筑後国也。日田隈町より筑後小保までは、川舟致上下由。
志波　福岡領　甘木より三里十丁
久喜宮　同領　志波より廿五丁
古賀村　はき　此所茶や数々。
左彦山への道筋有。
戸坂村　此間一つの谷川を隔双方に、
　従是　西北　筑前領
　従是東　日田御代官支配所
豊後国日田郡の内
関
　此間関山とて山越し。此辺より日田迄の間は、出店無之不自由。山坂大難所也。
祝原　鷹の巣村

是より発法谷と申所より荻野坂を下る。
」（66表）
にくし川
にくし村　右に隈町を見
友田村
日田　久喜宮より四里
豆田町　俵屋安兵衛
日田にて駕夫両人と先令に有之候ても、垂駕切棒の差別なく、駕壱挺五人宛出。賃銭も余分に取也。通行の人は心得可有之事也。
但人足壱人は壱里三十八文。馬は七十六文。
熊通り　波野　財津
しめし　藤山　此所より彦山へ道有。
日田より彦山へ六里。
秋原村　川向一ノ瀬村
此間山坂石原難所八丁坂といふ有。大難所也。
ふし木村　堺谷と申所、谷川を隔向ふに、従是東　豊前国下毛郡守実村と棒木建之。
此棒木手前一里木有。守実継所迄壱里也。
」（66裏）

茸木　出羽
守実　日田より四里
此村茶や二三軒有。人馬は彼場にて継。当所より彦山へ道有。五里有之由。
うそ村　仲間村
此間巌の中、切抜と二ヶ所通る。尤、前の穴は長さ三十間位窓有之。
宮園　守実より弐里近し。
町は継場より十八丁手前也。人馬は在郷庄屋宅にて継。
村入口　雲八幡宮と申社有。
右に嶋村　瑞雲寺村　杉畑村
かき坂村
左　平松村　梁ヶ平村　向道
右の村々を左右に見。
尾屋鋪と申所、出店壱軒
左に乙女子田村を見。
戸原村の内
口の林　宮園より弐里。谷内にてよき所也。
店や数々。此所にても人馬継の由。此町迦に飛石有。川を越、平田と」（67表）いふ

中津海道也。右羅漢道と有之方に行。
戸原　宮園より弐里拾丁
人馬庄屋の方に継立在郷也。此所も右羅漢道、左中津道に追分有。羅漢道は紀伊峠と申を越。戸原より壱里半有之由、当初より羅漢参詣いたし、田峠通四十丁位近道の由に付、同方に行。尤、駕は不通。空駕に候へは罷通。馬は不通。
たし田村　少しの峠を越。
跡田村　宿や等有。羅漢へ参詣の人致止宿。
羅漢寺
参詣道下向道有。奇異の霊場也。
右羅漢寺より樋田へ廿丁位、樋田より二丁程手前、巌穴を通る。長三丁も可有之哉。何れにも窓有之。
右巌穴は、昔然海と申僧、已前強盗にて有し処、致発起坊主に成、右巌穴を掘候由。右以前は極難所にて再々人馬怪我いたし候由。」（67裏）右守実より当所迄は中に川有。山国川と称す。又、所も山国と称し候由。誠に木曽谷と等しき山国也。戸原より樋田迄たる谷川筋に、野天渓といふ絶景無類也。

樋田・土田、此所より中津城下へ近し。夫より右に行。
旧木村　伊佐山村
福嶋　樋田より弐里五十丁道也。当初在郷也。庄やにて人馬継。
井戸田村　　のより村〈此辺より豊前／打開たる津留也〉。
富永村　大根川　福嶋より壱里。
久々姥（クヽバ）　茶や数々。
此所杖突まんぢうとて名物の餅あり。
此所より十五丁計行。
従是西　中津領
従是東　日田御代官支配所
右に阿曽のおぶく山　鍬崎山
四日市　福嶋より弐里。但五十丁道也。」（68表）

注記
本研究はJSPS科研費（課題番号JP18K00323　研究　代表者　鈴木元）の成果の一部である。